

# 鎌倉詩桜に飼いならされる 膝枕八幡宮

01 吾輩は先輩である

【詩桜】

「やあ、ようこそ」

【詩桜】

「今日はどうしたのかな」

【詩桜】

「ああ、理由がなければ別にそれでいい」

【詩桜】

「『近くを通りがかったから、私の顔を見に訪ねてみた』私の部屋を訪ねてくる理由は、君のそんな都合で充分だ」

【詩桜】

「私か？ 私も、今はちょうど暇を持てあましていた」

【詩桜】

「いや……はは、私に暇などないか」

【詩桜】

「そうだな、次の創作の切り口を捻りだしつつ、何かきっかけになればと、旅の行き先を探していた」

【詩桜】

「まあ、多少時間を持て余していたのには間違いない」

【詩桜】

「さ、上がるといい」

【詩桜】

「例の店で新しいコーヒー豆を見つけたんだ」

【詩桜】

「いま淹れるから、少し座って休んでいると……ああ」

【詩桜】

「いけないな、私としたことがうっかりしていた」

【詩桜】

「君が急に来るといいうから少なからず気持ちが上ずっていたようだ、パソコンを開きっぱなしにしていたとはな……」

【詩桜】

「ああそうだ、宿は、二人分の部屋をとるつもりで探していた」

【詩桜】

「君さえよければ、また一緒にどうかと思ったんだ」

【詩桜】

「まあこれはれっきとした取材の一環だからな」

【詩桜】

「経費として君の分の旅費は私がもうじやないか」

【詩桜】

「そう遠慮するな、私に付きあって、年から年中あちこちへ連れまわされていたのでは、いかに君が稼ごうと貯金する余裕すらないだろう？」

【詩桜】

「たまには年上の人間に花をもたせろ」

【詩桜】

「その代わり、多少は私の我儘に付きあってもらうが……」

【詩桜】

「『多少は』な」

【詩桜】

「フフ、何かを期待してくれても構わないぞ」

【詩桜】

「またあの日のように、私の膝の上へ君の頭をのせて、話そうじゃないか……」

【詩桜】

「ん、どうした驚いた顔をして」

【詩桜】

「君と敵対していたかのようにだった私が、これほど君に親しくしているのが不思議か？」

【詩桜】

「ふん、君は……私とのひと夏の思い出を覚えているのかな」

【詩桜】

「何故あれほど君に対して辛辣だった私が、これほど甘やかしたがりになってしまったのか……」

【詩桜】

「君を何故特別大切に想っているか、その理由が記憶にないというのなら、私との思い出を探しにいつてくるといい」

【詩桜】

「なに、焦ることはない」

【詩桜】

「私は君と泊まる宿を探しながら、君との思い出に浸っているよ」

【詩桜】

「甘やかされなくなったら、またここから話を始めようじゃないか」

【詩桜】

「まだここにいて、私の声を聞いているということ、私に膝枕されたいと解釈していいのかな」

【詩桜】

「いいだろう、コーヒーは冷めてしまいが……まずは君を甘やかさせてくれ」

---

【詩桜】

「ただ、いくら周りに人がいないとはいえ、とても他人には聞かせられない会話をするから……」

【詩桜】

「私の声が外へ漏れないよう、その耳でしっかり受けとめること」

【詩桜】

「さて、可愛がられる覚悟はいいな？」

---

02ひさ枕

【詩桜】

「さ、今日もここへ頭をのせるといい」

【詩桜】

「ああ、今日は……お座敷ではないから、横向きになるな」

【詩桜】

「正面がよければソファアの上へのって正座するが……たまにはこういった形もいいだろう」

【詩桜】

「さ、おいで」

【詩桜】

「ん、外を向くんだな」

【詩桜】

「てっきり顔を、私の身体へ向けて寝るものだと考えていた」

【詩桜】

「君が甘えなくなったら、この身体に顔をうずめることができるだろう？」

【詩桜】

「それではさすがに恥ずかしかったのかな……はは、まるで私が誘っているみたいだ」

【詩桜】

「そこまでのつもりはなかったんだ、許してくれ」

【詩桜】

「もちろん君から求められれば、断るつもりもなかったが……まあ、今日はまだ来たばかりだ」

【詩桜】

「その気にさせてしまったのならすまないな、まずは今の状況を楽しませてくれ」



【詩桜】

「以前は君の方が私の足に興味津々だったというのに、今では私の方が君を足にのせるのが好きなのだからおかしい」

【詩桜】

「とはいえ、三浦大根だのなんだの言われたのは忘れてはいないが」

【詩桜】

「はは、根に持っているわけではないから気にするな、むしろ感謝している」

【詩桜】

「君を生涯からかえるネタを提供してもらったわけだからな」

【詩桜】

「今後とも私の大根足ネタは永久に言うよ」

【詩桜】

「ああそうだ、せっかくこの状況なのだし、大根足ネタのお返しの一環として、君の身体に触れさせてもらおうかな」

【詩桜】

「なに、酷いことはしない……耳を綺麗にしてやろうというだけだ」

【詩桜】

「耳掃除……ではあるが、私の手元に耳かきはない」

【詩桜】

「だからこうして……指で汚れをぬぐってやる」

【詩桜】

「フフ、くすぐったいのかな……少し息が乱れているじゃないか」

【詩桜】「ちなみにくすぐったさから逃れようとしても、全力で抑えこむのでそのつもりで」

【詩桜】「ほら、耳をなぞられる気分はどうだ？」

【詩桜】「繰り返すが、これは大根ネタの仕返しじゃない」

【詩桜】「君を喜ばせようとして、とっている行動だというのを忘れないでもらいたい」

【詩桜】「もちろん、私自身が楽しんでいる部分もあるが……」

【詩桜】「フフ、人の耳をいじるとするのは楽しいな」

【詩桜】「君がつまらない意地を捨てられるのなら、私に甘えてしまってもいいんだぞ？」

【詩桜】「私に身体を預けてしまえるのなら、怖がらずに任せてしまえばいい」

【詩桜】「まあせっかくだ……耳の中も掃除してやろう」

【詩桜】「ははは安心していい、耳かきで脳を搔きだしたりはしない。今の私は優しい君だけの詩桜先輩だからな」

【詩桜】「なに、他人の耳かきなどした覚えはないが、私はやればなんでもできる。耳かきも得意に違いない、任せておけ」

【詩桜】

「まあ君が生意気な口を聞けば、この耳かきがどこに刺さるかはわからないが……フフ冗談だよ」

【詩桜】

「これからも、こうした触れ合いは継続的に行っていきたいからな……今日で全てを台無しにするような真似はしない」

【詩桜】

「最初から覚悟を決めた相手を叩き斬るよりも、安心しきって油断した相手を後ろからずぶりの方が面白いじゃないか……」

【詩桜】

「いや、ただのたとえ話だが。他意はない……」

【詩桜】

「さ、反対側の耳だ」

【詩桜】

「せっかくこうして君を膝の上へのせているのに、脅かしすぎたか……」

【詩桜】

「少しは優しい部分も見せなければ愛を疑われてしまいそうだ」

【詩桜】

「こうして普通の恋人らしい時間を過ごすのもたまにはいいじゃないか……君を膝の上へのせつつ、何気ない会話などしながら……」

【詩桜】

「いやしかし、そうだな……せっかくなら、こうした耳かきの時間も、君にまたとない景色など見せつつできれば最高だな」

【詩桜】

「伊豆諸島で別荘でも買って二人で出かけようか……いや、こうしてまったりとした時間を過ごすのであれば、温泉のある町がいいかもしれないな……山陰あたりはどうだろう」

【詩桜】

「いや、私は本気だぞ。今の生活も気に入っているが、やはりふとした弾みに、二人だけで愛しあうだけの時間と空間が欲しくなるときもある……私も君も、我を忘れて声をあげられるような……な」

【詩桜】

「なんだ、まだ本気にしていないのか？ それなら君をその気にさせるため、少し大胆な行為もしようか……」

【詩桜】

「たとえば、こんな行為で君の男の子の部分を溶かしてやろう……」

【詩桜】

「れろっ」

【詩桜】

「フフ、何を驚いている？」

【詩桜】

「君の耳の汚れをとる方法なら、耳かき以外にもあるじゃないか」

【詩桜】

「ほらこうして……」

【詩桜】

「れろっ、れろ……れろっ……」

【詩桜】

「くすぐったいか？ 反応があれば私は楽しい」

【詩桜】「もっと奥まで綺麗にしてやった方がいいのかな……」

【詩桜】「れろ……れろ、れろっ……れろ、はむっ」

【詩桜】「ん？ 耐えられなくなってきたのかな？」

【詩桜】「フフ、まあいいだろう……今すぐ君を果てさせるのが目的ではないしな……」

【詩桜】「本当だ、軽くじゃれあいのような悪ふざけがしたかっただけだ」

【詩桜】「現に今は優しい気持ちでいっぱいだ……こうして君の頭を撫でるのが楽しい」

【詩桜】「母性……とも違う、なんだろうなこれは」

【詩桜】「他に対象がないから、私も『こうだ』とはつきり説明はしづらいんだが……」

【詩桜】「母性というには、もう少し愛欲の混ざった感情だ」

【詩桜】「私には弟などいないが、姉弟……というのも違う気がする」

【詩桜】「これはきっと、可愛い後輩で遊んでいる感覚だな」

【詩桜】「母性は包みこむような愛情、姉弟であれば庇護欲のようなものだろうか」

【詩桜】「今の私は、君に構って、面倒を見てやりたいんだ」

【詩桜】「だからこうして頭を撫でていると、愛しいというより楽しい」

【詩桜】「私に悪戯をされる君が、動揺しつつもそれが心地よくなっていたら嬉しいんだ」

【詩桜】「なんなら私に飼われてしまうといい、愛情をもつて一生面倒を見るよ」

【詩桜】「もっとも、それでも私に、本心からは飼いならされない君との関係が面白くもある……」

【詩桜】「相手が母親であれば、飼いならされるのに抵抗もないだろう」

【詩桜】「私相手にはどこかまだ少し生意気だ、そんな君と甘いじゃれ合いをするのが楽しいんだ」

【詩桜】「私は君のひとつ年上に生まれてよかったと思っているよ」

【詩桜】「たった一年早く生まれただけで、特に理由もなく偉そうにできるからな」

【詩桜】

「君も年下にかかわれてはプライドに触るだろ  
う、私はこうして甘やかしつつからかっても許さ  
れる空気だ。役得というやつだな」

【詩桜】

「さて、それじゃあもう少し君をイジるのを楽しま  
せてくれ」

【詩桜】

「我慢ができなくなったら責任はとる、私にくすぐ  
られて我慢する君の顔が見たいんだ」

【詩桜】

「れろ、れろっ、れろお……れろっ、れろっ、れろ  
……」

【詩桜】

「はあ……そんなに可愛い反応をしないでくれ」

【詩桜】

「耳掃除をしている筈が、別の欲求が混ざってしま  
うだろう……」

【詩桜】

「こんな風に……もっと奥の方まで……」

【詩桜】

「れろお、れろっ、れろ……れろ、れろっ、れろお  
……」

【詩桜】

「ふう……他人の……いや、君だからだな」

【詩桜】

「恋人の耳をいじるのは楽しい、癖になりそうだ」

【詩桜】

「癖になったら、君は私の楽しみのために、何時間  
でも耳を舐めさせてくれるのかな？」

---

【詩桜】

「私は君を好きに扱ってみたいし、そんな私を君も好き勝手に扱ってみたいだろう」

【詩桜】

「また、私も君から好きに扱われない欲があるし、今こうして耳をいじられている君を見る限り、私から好きに扱われてみたい欲もあるようだ」

【詩桜】

「相違相愛でありながら挑戦的な私たちの関係、いいじゃないか」

【詩桜】

「恋人になっても、付きあう前と同様、お互い馴れあわずにいたいものだな」

【詩桜】

「まあ、挑戦的なのは性事情に関してのみで、普段の私は君を可愛がってやるつもりだが」

【詩桜】

「さて、コーヒーを飲もうか？」

---



03 しおから

【詩桜】「さて今日は、君を、私の好きにさせてくれる約束だったな」

【詩桜】「先日の耳掃除の際に話した通り、私と君は相思相愛でありつつも、馴れ合いを好まない挑戦的な関係だからな」

【詩桜】「君が私に貸しを作ってしまった以上は、私の好きに扱われるのは仕方のないことだ」

【詩桜】「ん？ ああ、貸しについては気にしなくてもいい」

【詩桜】「このまま借りを返さず、永久に私の貸しにして『君を好きに扱う権』を保持しておきたいまでもる」

【詩桜】「というか君に貸しを作るタイミングを窺って、今か今かと目を光らせていたからな」

【詩桜】「それを悟られては、君が私に頼らないだろうから、下心を悟られないよう親切を装うのは苦労したぞ……」

【詩桜】「あっすでに作った貸し借りを無しにはできないぞ、他のもので返したりも認めないからな」

【詩桜】「私は今から君を好きにすると決めたんだ、事ここに至った以上は逃さないぞ」

【詩桜】

「ん……私が楽しそうに見えるのかな」

【詩桜】

「まあ私も男性とのお付き合いは初めてだからな、君の前では理性的な女性でいたいと思う反面、年相応に浮かれてみたい気持ちは常にある」

【詩桜】

「今回に関しては、年相応どころか、大いに羽目を外している己も自覚しているが……性に関しても、楽しんで行おうじゃあないか」

【詩桜】

「恋人同士の営み一つとっても、こういった駆け引きが生じるのは好物だ、フッフ」

【詩桜】

「さて、こうして焦らすのも楽しみの一つではあるが、輪ゴムを引っ張るのはこのくらいにして……さ、おいで」

【詩桜】

「何をするかって？ 私の膝の上へ頭をのせるんだ、君が」

【詩桜】

「まあこれだけでは、普段と変わらないように思えるだろうな……フフそう不安そうな顔をするな、君の不安を上回る恥ずかしい行為をするつもりだ」

【詩桜】

「そうして私の企みを讀もうと不安がる君も可愛いな……ああそんなに脅えた顔を見せないでくれ、計画を全て白紙に戻して襲いたくなってしまう……」

【詩桜】「でも今日は存分に君を可愛がってやりたいんだ、さあおいで」

【詩桜】「ちなみに君が躊躇って時間を引き伸ばせば引き伸ばしただけ、私もこのあとで君が一番気持ちいい瞬間を焦らして焦らして泣いて哀れに懇願するまで焦らす。そういうのがお好みであれば、膝枕を引き伸ばしてもいいが」

【詩桜】「さらに今日このまま膝枕せずに終わった場合は、君が今日の事を忘れるまで何食わぬ顔をして過ごし、頃合いを見て、甘い甘い会話の末の恋人の営みをする際に、ねちっこく奉仕して、これでもかと言わんばかりに最高の快楽を味わわせて、けれど一番気持ちいい瞬間だけはお預けにして終わらせる」

【詩桜】「その時ばかりはどれだけ必死に懇願しようといかせずに終わらせる」

【詩桜】「一番気持ちよくて、物足りないところで、終わらせる」

【詩桜】「うん、私の本気度が伝わってくれたようで嬉しい」

【詩桜】「素直に膝へ頭をのせるのが一番だ」

【詩桜】「今日はただ気持ちいいことをするだけだからな、フフ……」

【詩桜】

「こうして頭を撫でていると、何もせずに、優しく可愛がってやりたい気持ちもあるが……こんな機会は滅多にないからな、今日は私の趣味を優先させてもらう」

【詩桜】

「これほど興奮している自分にはなかなか覚えがないからな……私は自分の想像以上に性欲の強い女だったようだ」

【詩桜】

「いや、君だからかな……君との数々の行為で、私の性的嗜好はかなり歪まされた。その責任を払ってもらおう……」

【詩桜】

「フフ、君の耳は私の好みの形をしているな……この耳が私は好きだよ」

【詩桜】

「先日の耳掃除以来、私は君の耳をいじるのが好きなんだ……こうして指でなぞって……フフ、気持ちいいか？」

【詩桜】

「耳の複雑な形が、これほどいじり甲斐のあるものとは……耳輪の柔らかさはたまらないな……」

【詩桜】

「対珠のコリコリ感もたまらない……人差し指で何度も搔いてやるのが楽しい……耳珠をつまんでいるときなど、もうこの耳を持って返りたくなるほどだ……おっと、怖がらせてしまったな」

【詩桜】

「詫び代わり……と言ってはなんだが、耳を舐めて気持ちよくしてやろう……れろっ」

【詩桜】

「れろっ、れろ、れろお……れろっ、れろ……」

【詩桜】

「はあ……外側だけでは物足りないだろう……奥まで舌を挿しこんでやるからな……れろお」

【詩桜】

「れろっ、はあっ、はあ……れろ、れろっ、れろお……れろっ、れろっ」

【詩桜】

「はあっ、はあ……楽しい……君も感じているんだろう？」

【詩桜】

「もどかしそうに身体を震わせている君に興奮するんだ……今日はその様をよく堪能させてもらっ」

【詩桜】

「要は、快感に震えるもどかしくて仕方ない君を楽しみたいと、今日の趣旨はそういうことだ」

【詩桜】

「もちろん、もどかしいままおあずけなんてことはなく、最後には最高の気持ちよさを提供するつもりでいる」

【詩桜】

「ほら、もう我慢できないんだろう……？」

【詩桜】

「ベルトを外すぞ……君は何もしなくていい、私に任せていろ……手が寂しければ、そうだな……私の足でも撫でていい」といい

【詩桜】

「ああ、腰だけは浮かせてくれ……取りだすのにズボンと下着を脱がせなくてはならないからな……」

【詩桜】

「ははっ、下着に引っかかって脱げない……そんなに大きくなっているのか、よっ……と」

【詩桜】

「はは、耳を舐めただけでこんなに大きくなるとは……すっ、すまない、私はいま興奮して……君を悦ばせたくて仕方なくなっている……!」

【詩桜】

「耳もいいが、やはり、ここも可愛いな……少し撫でるぞ……この筋を撫でるのがいいんだろう……? 耳を舐めながら……」

【詩桜】

「れろ……れろ、れろっ、れろ……はぁ……はは、ここがびくびく震えて……出したいのか……? まだ駄目だ……れろっ、れろ……はっ、はぁ……この根本を触られるのも好きだったな……ほら……フフ、気持ちいいところをびくびく震わせて……れろ、れろっ……可愛いな、はぁ……」

【詩桜】

「さて、もっと気持ちよくしてやりたいが……今日は、フフ……ここは自分の手でしごいてもらおう……」

【詩桜】

「男の子は一人でするものなんだろう? それを私の前でしてみせて欲しいと言っている……」

【詩桜】

「私がするのは愛撫だけだ……ああ、最後には私の手でも口でも足でも、身体の好きな部所を使ってイカせてやる……」

【詩桜】

「これだけ私が手抜きをしていると思われるかな……むしろ逆なんだ」

【詩桜】

「私の両手と舌を使って、君の身体のあらゆるところを愛撫してやりたい……」

【詩桜】

「私に本目の手があればいいんだが、角度的に手が届かない場合もあるからな……君に愛撫を施しつつ、ここは射精寸前の最高の状態で準備してもらいたい……」

【詩桜】

「私のことは、君の快楽を高める人形だとも思えばいい……私の手も口も足も、君が気持ちよくするための道具だ」

【詩桜】

「私は私で君を見て楽しませてもらう……さ、私の前でしてみせてくれ」

【詩桜】

「ん、どうした？ 恥ずかしいのか？ 気持ちよくなりたいだろう？」

【詩桜】

「ほら、扱くんだ」

【詩桜】

「自分で扱かないと、こんなに気持ちいいことをしてもらえないのに、イクことはできないぞ……？」

【詩桜】

「内腿を撫でてやろう……ここを撫でられるこそばゆさは、君が足フェチなお陰で私もよく知っているからな……」



【詩桜】

「ここを指でなぞられるとゾクゾクするだろう？」

【詩桜】

「股間に近づくにつれて……もっと気持ちよくなるぞ？ ほら扱け」

【詩桜】

「頑張って扱けば最後にいいことあるぞ？」

【詩桜】

「自分で扱きながら私の口の中へ出せるんだ」

【詩桜】

「二人で手を重ねあって一緒に扱いてイクのほうがいいな」

【詩桜】

「君が望みながら最後は私の足で挟んでやるのもいい」

【詩桜】

「ほら扱け……両耳をいじりながら君とキスをしつつ射精を高めるには、君自身に扱いでもらうしかないんだ」

【詩桜】

「耳を舐めてやるから扱け……れろっ、れろ、れろっ……れろ、ちゅっ、れろ、れろお……」

【詩桜】

「それとも乳首の方がいいか？ ほら手がシャツの中へ入っていくぞ？」

【詩桜】

「ほら捕まえた……男の子が乳首をいじられたときに、どんな声を出してみせるのか知りたいな？」

【詩桜】

「なあにここには私しかないのだから、恥ずかしかることはない」

【詩桜】

「気持ちよくなりたいだけの自分を曝け出してみろ、きつと我を忘れた方が気持ちよくなれる……ほら」

【詩桜】

「うおっ！」

【詩桜】

「……おおっと、想像以上の反応だったな……男の子も乳首をいじられると気持ちいいんだな、可愛いぞ」

【詩桜】

「なに？ 気持ちいいよりくすぐったいに近い？ いいことじゃないか、もどかしければもどかしいだけいい」

【詩桜】

「ほら、乳首をいじりつつ……耳舐めだ、れろっ」

【詩桜】

「気持ちいいんだろう？ 君の先からぬるぬるしたものが少し漏れたぞ……ああ、興奮する」

【詩桜】

「男の子は気持ちいいとすぐに出てしまうからわかりやすくいいな、ふふっ」

【詩桜】

「あんまり可愛いからキスをしようか……んむっ」

【詩桜】

「んむ、ちゅっ、んむっ……れろっ、れろ、れろっ……はあっ……」

【詩桜】

「ふふ、キスをしながら耳も乳首も舐められるよ、舌が本あればいいんだが」

【詩桜】

「まあそこは、つばをつけて手でいじるから許してやってくれ」

【詩桜】

「ほらぬるぬるの指で乳首をいじられるのは……ふっ、可愛い。最高の反応だ」

【詩桜】

「ああ駄目だ、たまらなくなってきた。私が君に舐められたいくらいだ」

【詩桜】

「ちゅっ、んちゅ、ちゅっ、れろっ、ちゅっ、れろお……ちゅっ、んむっ、ちゅっ、れろっ、んむう……ちゅっ、れろっ、んむっ……んっ？」

【詩桜】

「ふっ、ははっ……ようやく扱きはじめてくれた……乳首と耳が気持ちよかったのか？」

【詩桜】

「それとも愛情を込めてキスをしたのがよかったのかな……」

【詩桜】

「じゃあ次は乳首を舐めてやろう……はあっ、君の乳首、大きくなっているじゃないか……こんなに充血して……れろっ」

【詩桜】

「ちゅっ、ちゅうっ、れろっ、ちゅうっ……れろ、れろお……れろっ、ちゅっ、れろっ」

【詩桜】

「私に乳首を舐められながら扱くおちんちんはどうだ？ 今までにない気持ち良さなんじゃないか？」

【詩桜】

「ああ……この硬い脇腹を撫でるのも楽しい……おへそも舐めてやる……れろっ」

【詩桜】

「れろ、れろっ……れろっ、はは、この位置は、君の扱く手が見られていい……顔が見られないのだから残念だが」

【詩桜】

「もっと必死に擦るといい、ほらほら、扱け、扱け」

【詩桜】

「ああ、たまらないな……すまないな、膝枕はここで終わりだ……代わりに、私の腿で君の顔を挟んでやる」

【詩桜】

「私は……君の内腿を舐めたいんだ」

【詩桜】

「れろっ、れろ、れろお……れろ、ふうっ、んっ、れろっ……れろ、れろっ……」

【詩桜】

「はは、君も私の足を舐めているだろう……お互いの足を舐めあうのも悪くないな……れろっ、れろお……」

【詩桜】

「あっ、馬鹿……そこは舐めるな、趣旨が違っ……んっ」

【詩桜】

「私は愛撫される側ではなく、君を一方的に愛撫していたんだ……んんっ！」

【詩桜】

「くっ、今回の営みにおける、君を愛撫して楽しもうというコンセプトが台無しじゃないか……不用意に君の上へまたがった私も悪いが……」

【詩桜】

「そういう人の楽しみを邪魔する悪い男の子は……精液のいっぱい入った袋を舐めてお仕置きだ……あむっ」

【詩桜】

「れろっ、れろ、あむっ……れろ、ちゅっ、んむっ……んむ、ちゅうっ……ちゅっ、れろっ、んむう……」

【詩桜】

「はは、やはり反応がいいな……れろっ、んむ、ちゅっ、んむちゅううう……ちゅっ、れろっ、んむっ、ちゅっ、ちゅうっ」

【詩桜】

「はあっ、毛が邪魔だな……いずれ剃ってしまうか……れろっ、ちゅっ、れろお……れろっ、ちゅっ、れろっ、んむちゅっ……」

【詩桜】

「んむ、このままでは君が扱にくそうだな……君の下半身側へ回りたいが、そうになると、君を足で挟めなくなる……それは君も寂しいだろう……」

【詩桜】

「となると……君、身体は柔らかい方だったか？引っくり消して抱えこむぞ……よっと」

【詩桜】

「フフ、なかなか凄いい格好だな……こういう体勢をなんと言ったか……私は仕事柄見慣れない単語はすぐ調べるようにしているんだが、こういった言葉には中々縁がなくてだな……そう、ちんぐり返しと言ったか、凄い言葉だな」

【詩桜】

「少し苦しくて、扱きにくいかもしれないが……絶対気持ちよくしてやるから、私を信じて手を止めるな」

【詩桜】

「ここはぜひ愛撫してやりたかったからな……フフ、少し掂げるぞ……」

【詩桜】

「何をされるかわかってしまったようだが、この体制では抵抗もできないだろうフフフ」

【詩桜】

「じゃあ君のお尻の穴……舐めるぞ、れろっ」

【詩桜】

「れろっ、れろ、れろ……れろっ、れろお……れろ、れろっ……ふふ、いい反応するじゃないか……!」

【詩桜】

「私の足に挟まれつつ、お尻の穴を愛撫されながら扱けるんだ、最高だろう……?」

【詩桜】

「もうちょっと奥まで舌を挿れたいな……少し挿しこむぞ、れろお……れろっ、れろ、れろっ……」

【詩桜】

「れろ、れろっ、れろ、れろお……れろ、れろっ、れろ、れろお……はあっ、はっ……君の顔が見られないのだけが残念だ……れろっ、ちゅっ」

【詩桜】

「ん、イキそうか？ イキそうなんだな？」

【詩桜】

「わかった、この態勢なら……口がいいな、啜えてやる」

【詩桜】

「君はそのまま手を動かし続けられ……ずっと吸い続けてやるから、好きに時に出せ……あむっ」

【詩桜】

「ちゅうっ、ちゅっ、ちゅうっ……れろっ、れろれろ、ちゅっ、れろっ、ちゅうっ……ちゅうっ、ちゅうっ……！」

【詩桜】

「はっ、ふうっ……私の口を、君が気持ちいいものを吐き出すための穴だと思って……遠慮なく絞りだしていい……！」

【詩桜】

「ちゅうっ！ ちゅうっ、ちゅうっ、うっ！」

【詩桜】

「んっ！？ んぶっ、んんんんんっ！ ちゅうっ……んむっ、ちゅうっ……！」

【詩桜】

「んっ、「くっ……んむ、ちゅうっ……ん、「くっ……「くん……」

【詩桜】

「はあっ、はっ、はあっ……ふう……私の口から溢れるくらい、いっぱい出したな……少し漏れてしまった……んぐっ、ごくん……」

【詩桜】

「ああ、いや……満足したのなら、いい……私自身、興奮していたのもあるが……君に、君一人では味わえない快感で悦んでほしかった」

【詩桜】

「理由？ 私が君の年上の恋人だから以外にあるか？」

【詩桜】

「後輩というものは面倒を見なくなるものなんだよ、愛しい恋人なのだから尚さらだ」

【詩桜】

「まあ、あと……純粹に可愛かったのもある、君がな」

【詩桜】

「男性に可愛いと言うのはあまり良くないらしいが……私はどうしても君をお気に入り扱いしてしまう、許してくれ」

【詩桜】

「ああ、太ももで挟んだままでは喋りにくかったな……それも、下に敷いて」

【詩桜】

「すまなかったな……ん？ 私の顔が見られない？ はは、最高の反応だ」

【詩桜】

「今さら恥ずかしがらなくていい……私の前では君の全てを見せてくれ」



---

【詩桜】

「同級生や年下の恋人相手では出せない君の顔を見  
せてもらわなくては……恋人が私でなくてはいけ  
ない理由を一つひとつ増やしていきたい」

【詩桜】

「というわけで、他人には恥ずかしくて求められな  
い性的嗜好があれば言ってくれ」

【詩桜】

「お尻の穴まで舐めたんだ、もう照れることなどな  
いだろう……また可愛がってやる」

【詩桜】

「私なしでは生きられなくなるように……な」

---

04問

【詩桜】「さて今日は、私が、君の好きに扱われる約束だったな……」

【詩桜】「私としたことが、君に借りを作ってしまうとはな……その返済に、私を好きにしたいと言われては、不本意ではあるが従わざるをえない……」

【詩桜】「先日、私が貸しを作った時は、私の好き勝手にさせてもらったからな……自分はしたいようにするが、自分が同じことをされるのは御免こうむる……というわけにはいかないだろう」

【詩桜】「とは言っても、私は君から好きに扱われるのはむしろ臨むところだ」

【詩桜】「したいようにすればいい……まあ好きしろ、抵抗などしないとは言っても、人間の反射としてごく普通に起こり得る動きはしてしまうかもしれないが……興奮のあまり、ついうっかり手が出てしまったら……フッフ」

【詩桜】「あっ待て！ また、また縛る気か！ いや別に嫌じゃあないが……わっ、私にだって、一応の羞恥や恐怖はあるからな！？」

【詩桜】「うっ、くっ……ま、まあ、迂闊にも、後先を考えず君に頼み事をしてしまったのは私だ……それも、それなりの面倒をかける形で……」

【詩桜】「だからまあ、できる範囲での要求には応えよう……繰り返すが「できる範囲で」な」

【詩桜】「あっ！　こら、いきなり腋を……！　私がくすぐりに弱いのは、わかっているだろうに……いや待て、ちょっ……いきなりか！？」

【詩桜】「ひうつ！　あっ、やあああ……！　これ、はっ……私の「できる範囲」を超えているのでは……！　くすぐりを我慢できる人間など、そうはいないだろう……！」

【詩桜】「やめっ、ひゃっ！　ひふっ、はっ、ひゃふッ……！　あは、あはははっ！」

【詩桜】「くっ、抵抗できない人間、それも女性相手によくもやる……！」

【詩桜】「だが私も少し学んだんだ、脇に力を入れて引き締めれば、くすぐられても多少は耐えられるようになる……そしてしばらく耐えれば、感覚が麻痺して、大してくすぐったくなくなるんだ」

【詩桜】「あっ、やめっ……！　足の裏を舐めるな、そこは力を入れられない……！　ひッ、やっ……！　そこは駄目、だ……！」

【詩桜】「はあっ、はっ……くすぐりは、本当に耐えられないから、抵抗できない時はやめよう……やめないか？　いや別に気持ちよきは……」

【詩桜】「あッ、んっ、ふう……んっ！ あっ、やあっ、あッ、ああっ……やめっ……」

【詩桜】「足の裏、舐められたあとは、なんだか身体がおかしいんだ……全身が性感帯になったかのような……だから待て……ひんッ！」

【詩桜】「あっ、やめ……そこ……は、やめろ……いやだから、そこ……なんだ、繰り返し聞いて……私の口からはつきり言わせたいのか？ 君も大概ヘンタイだな……」

【詩桜】「クリは、いま敏感だからやめろ……あっ、んッ……！ くッ、そこを重点的に……んッ、あっ……はあッ……」

【詩桜】「も、もういい、好きにしろ……そもそも、君から好きに扱われるのは、私の望むところだ……」

【詩桜】「可愛がっている君が奉仕してくれるというのだから、喜ぶべきだな……そうだ、DMの君が喜びそうな言葉をかけてやろう。さあ、お舐め」

【詩桜】「女王様気分で舐めさせてやると思えば、気分もよくなってきた。なんならあとで踏んでやろうか……？」

【詩桜】「あッ、ちよっ、どこを拵げ……まま、待て待て、そっちはまだ……あっ、やめっ……尻の穴を、拵げるなあっ……！」

【詩桜】

「んッ、ふうっ……はあっ、やめ……あッ、はあっ……うっ、んッ……ん、ふう……」

【詩桜】

「はあっ、はあ……き、君に、身体を開発されとは思わなかった……いや、さすがに抵抗はある……」

【詩桜】

「せめてその、なんだ。君がしたいのなら、事前に準備はしておいたんだが……」

【詩桜】

「あっ、やめ……だから、その君は……君に抵抗がなければいいんだが……あっ、んんッ、ふうっ……はあっ、あっ、やめ……力が抜ける……」

【詩桜】

「はあ……まさか君に、イジメられるとは思わなかったぞ……慣れてないからな、私だって怖いだろう……」

【詩桜】

「あッ、やっ！ やめ、クリをイジるな……なんだ、気持ちの問題か……胸が、切なく……んッ！」

【詩桜】

「ああッ、あっ、あっ、はあっ……あっ、ああッ、そんな、ねちっこく……あッ、ああッ、んッ、うっ……あっ、ああッ、んッ！」

【詩桜】

「はあッ、はあっ……くすぐりに弱い自覚はあったが……なんだ、私はクリも弱いのか……そんな執拗にされると……んッ！ ああッ、気持ちが悪くなる……」

【詩桜】

「比較対象がないから、自分が特別弱いのか心配になってくるな……んッ、あッ、だからと言って、そこばかり……あッ、ああッ、脳がふやける……」

【詩桜】

「あッ、やめっ……！　なんでそこで、脇をくすぐる……舐め、るなあッ……！」

【詩桜】

「ああッ、どうして脇でこんなに……あッ、ああッ、あッ、くっ、身体が……くねる……！　自分が、こんな……君に、開発される、とは……！」

【詩桜】

「君のせいで……最近、自分の脇が気になってきたんだぞ……んッ、ノースリーブの服など着ようものなら、君に脇を触れられるんじゃないかと……」

【詩桜】

「君に本気で脇を責められたら……街中でも抵抗できなくなってしまうそうだからな……んッ」

【詩桜】

「あッ、だから脇を責める、な……んっ！　あッ、ああッ、やッ、君は、なかなかいやらしい性格だな、私の……弱点ばかり……んっ！」

【詩桜】

「ひああうっ！　あッ、やッ、あああッ、やッ！　やめっ、あッ、ああッ、首筋、まで……ああッ、私の身体が、こんな、敏感に……」

【詩桜】

「あああああっ！ 耳、だめ、だっ……ああっ、やめっ、今、舌挿れられたら……ひゃうっ！ ああッ、あっ、やめ、堕ち、る……ああっ、あッ、やっ……」

【詩桜】

「はあっ、はっ、全身が熱い……少し、怖いが……自分の新しい部分が見つかっていくのは……恐怖とはまた別に、興奮もするな……」

【詩桜】

「興味はあったが、自分がこれほど、性行為にのめり込むとは思わなかった……自分はもっと淡々としているものだと思いこんでいたが、その根拠のない自信を打ち砕かれたよ……フフ……」

【詩桜】

「自分を開発していく相手が、よりもよって、可愛がっている後輩というのが皮肉だな……君に可愛がられてしまうとは……」

【詩桜】

「まあ、かくいう私も、君を開発するの好きだしな……いつか乳首だけで君を満足させてみせる……甘えて許しを懇願する君の声を聞いてみたいフフ……」

【詩桜】

「あっいや、だからと言って、私の乳首を責めてほしいわけではなくてだな！？ あっ馬鹿、やめ……んっ！ ああっ、あっ、はあっ……」

【詩桜】

「こらっ、人の胸で遊ぶな……ああッ、あっ、乳首をつまんで持ちあげるな……たぶたぶするな！」



【詩桜】「君は人の胸をゴム毬かなにかだと思ってないか……んッ、くうッ、はっ、んんッ……」

【詩桜】「あっ待て待て、乳首をいじりながら脇舐めは……やめえっ……！ あっ、くふう……んっ、あッ、はあっ……んっ、だめえ……」

【詩桜】「はっ！ いや、なんでもないなんでもない、馬鹿違う、甘えた声など出していない」

【詩桜】「今のはあれだ……君の気づかない部分で、虫が私の鼻に入ってきてだな……つまり、いま甘えた声を出したのは君に対してではなく、虫に対して……」

【詩桜】「あっ、やめえ、あっ！ ああっ、乳首と脇を同時に責めるのはやめろ……あっ、ああッ、だめえ！ あっ、ああっ、やあんっ！」

【詩桜】「あっ、ああっ、溶ける……自分が自分でなくなりそうで怖い……あっ、あふッ、んっ、ああっ……ひあっ、あっ、ああッ、くすぐったさが……ああ……快感、に……」

【詩桜】「ああッ、はっ、ああっ、やめっ、ああっ、この、ままだと……ああっ、直接触られてないのに、イク……ああっ」

【詩桜】

「あつ馬鹿、いまクリをいじられたら……ああッ、あッ、ああッ、ばか、イク、ああッ、あッ、わたし、がつ、前に噴いたのは見ているだろう……！」

【詩桜】

「ああッ、やめろッ、あッ、クリッ、つまむな……こするなあ！ あッ、無理だッ、あッ、やめッ、ああッ、だめえ！」

【詩桜】

「あッ、イクッ！ ああああッ！ ああああああッ！ ああーッ！」

【詩桜】

「ああッ、あッ、ああ……はッ、ああッ……はあッ、イツ、て……しまった……また、潮を噴いて……なにが『潮先輩だけに』だ、うるさい……」

【詩桜】

「はあッ、このイク感覚もだいぶ覚えこまされたが……慣れはしないものだ、未だに噴く瞬間は少し怖い……別のものが漏れでてしまう怖さもあるしな……君、そういう趣味はないよな……？」

【詩桜】

「それは、それとして……私の果てる姿を見て、君は充分に興奮したんだろう？」

【詩桜】

「私をイカせただけでは、君が満足してないだろう？ イッたばかりの私が言うのもなんだが……私も今、君をがむしゃらに感じたい……君を私の身体の中で感じたい」

【詩桜】

「私からは抱きしめられないからな……まあ、手を  
ほどかれたら普通に逆襲するしな……だからま  
あ、この胸の中へ顔をうずめて……身体を密着さ  
せて、思い切り突いてくれ……」

【詩桜】

「んッ！ んんッ、んっ、あっ、うんっ……！  
あっ、はあっ……！ 入って、きた……！」

【詩桜】

「自分の身体ながら、君を普段より締めつけている  
のがわかる……んッ、イッたばかりだから、身体  
が弛緩しているものかと思いきや……やっ、よほ  
ど、君に挿れてほしかったのかな……」

【詩桜】

「あっ、くうっ、んッ、ああっ……やっ、こすれ、  
合うのが、中で感じられて……んッ！ いつもよ  
り君を感じる……んッ！」

【詩桜】

「はあっ、あっ、やっ、脇舐め、だめえっ……！  
ああッ、あっ、くっ、こんなときまで私の弱点を  
……んッ、いや、いい……そのほうが、やっ、私  
も夢中になれる……」

【詩桜】

「あとは……ああっ、やっ、キス、しようか……ん  
ッ！ 繋がっているときにキスをするのは、好き  
なんだ……はっ、ああっ、んっ……！」

【詩桜】

「んっ、ちゅっ、ちゅうっ、れろっ、はあっ、は  
ッ、んっ、ちゅうっ……ちゅっ、れろっ、ん  
うっ、はあっ、んっ……」

【詩桜】

「あっ、ああっ、これ、また、イク……！ イッたばかり、なのに、もう……んッ！ はあっ、私は、よほど興奮して……あッ、ああっ！」

【詩桜】

「ははッ、私は、君にイジメられるのが、好きなのかもな……可愛がっている後輩から、こうして逆に、可愛がられるのが……より被虐心を煽られる……」

【詩桜】

「あッ、はあっ、あっ、ああッ、あっ、んっ……あっ、くうッ……イクっ、んっ、ああッ、あっ、ああっ、これはっ、もうっ……ああっ、最後は、キスして……んッ！」

【詩桜】

「ふあッ、あああああああーっ！ ああっ、あっ、また、嘖くっ……！ ああっ、あっ、あああああっ！ やあああああっ……」

【詩桜】

「んむっ、ちゅっ、ちゅうっ……ちゅっ、はあっ、あッ、ちゅっ、んむっ、んむう……ちゅっ、んむう……はッ、ああっ、あッ、はあっ……」

【詩桜】

「イキながらキスをするの、気持ちいいな……きちんと私のお願いを聞いてくれたのもポイント高いぞ……君は、どうだ……？ 満足できたか………？」

【詩桜】

「あー……こんな短時間で、2回も嘔いてしまうと  
は……まさか、嘔きやすい体質なのか、私は……  
……？ 身体が癖になってなければいいんだが……  
……」

【詩桜】

「いっ、いや、当然、嫌……ではないかもしれない  
が、困るには困るだろう、こんなに嘔かされてばかりでは……君からいいようにしてやられる……  
……」

【詩桜】

「まあ、私は、自分の中にMの心があるのも理解した……君にイジメられるのは嫌いじゃない……」

【詩桜】

「だが最高のMは最高のSを兼ねると聞くな……？  
私は、君にイジメられるからこそ、遠慮なく君をイジメられるというもの……Mの心を知ったからこそ、限界というものもわかるしな……」

【詩桜】

「なんだ？ まだ私をイジメたいという言うのか？  
いいだろう、今日は好きにすればいい、借りを作ったのは私だしな……」

【詩桜】

「しかし、今日徹底的にイジメられれば、次のときに3倍返して君をイジメてあげられるな……？」

【詩桜】

「君にイジメられていると、その時を思い浮かべて興奮するんだ。この屈辱を君に味わせたら、さぞ楽しいだろうなと……」

【詩桜】

「ん？ 何もしないのか？ どうせ手遅れなんだから、いま好きにしておいた方がいいぞ？ 次に私が主導権を握った時は何の躊躇いもなく、君を可愛がり抜いてやるからな……」

【詩桜】

「君が私の弱点を掴んでいるように、私も、どうすれば君を鳴かせてやれるかをよく知っている」

【詩桜】

「今日私は2回嘖かせられたな……3倍返しだから、君が私に貸しを作ったときは6回イカされるのか……今からそのときが楽しみだ」

【詩桜】

「この間、男性の潮吹きについて研究したんだ。空っぽにした上でさらなる絶頂を迎えさせてやると、透明な潮を噴くらしい。絶対に、手加減も容赦も、しない」

【詩桜】

「これだから君にイジメられるのは好きなんだ……さ、もっと私をイジメてくれ。お互いに馴れ合いは好まない、それが私と君の関係だろう？」

【詩桜】

「ははっ、君が優位の状態なのに、そんな脅えた顔を見せないでくれ……今すぐ可愛がりたくなってしまう」

【詩桜】

「これからも、お互いにお互いの知らない自分を開発し合っていこう……愛しているよ、フッフ」

05ころころ

【詩桜】

「……もう寝てしまったかな」

【詩桜】

「最近の君は、よくやっている」

【詩桜】

「疲れているだろうに、またしても行為が過激になっちゃった……などと反省はするんだが、私はいつもこうだ」

【詩桜】

「反省どころか、回数を重ねるごとに、よりマニャクな方向へ進んでいる気がする」

【詩桜】

「すまない……と私が謝るのを君は嫌がったな」

【詩桜】

「気の毒と言えいいだろうか、君は普通に愛しあうだけで充分なのだろうが、私はつい刺激を求めてしまう」

【詩桜】

「君はどちらかと言えば、正常な側の人間だったと思うんだ」

【詩桜】

「それがこうして、愛の営みさえ真っ当に行えず、君を少し気の毒に思っている」

【詩桜】

「世間の恋人のように……私はそれを『おそらく』でしか知らないが、勝ち負けや貸し借りなどのない性行為が普通なのだろうな」

【詩桜】

「そんな普通さえできない私は、君の恋人として、他の女性たちよりも劣っているのだろうと、特に行為のあとはそう思う」



【詩桜】

「落ちこんでいるわけでも、ましてや、君の恋人であることを否定しようだなんてつもりはないんだ」

【詩桜】

「ただ、普通よりも劣っている私に、君はよく付きあってくれている……と、愛しさを覚える」

【詩桜】

「私との恋愛は大変だろう？」

【詩桜】

「きっと今後も、誰もが憧れるような、手を握りながら街中を歩き、晴れた公園のベンチで休憩をとりながら、お互いの幸福を確かめあって微笑みあう……ような恋愛は、私にとって難しいかもしれない」

【詩桜】

「それでも君は、困った顔をすることはあっても、嫌な顔ひとつせずに、私を好きだと言ってくれる」

【詩桜】

「よくなついてくれる後輩とは可愛いものだ」

【詩桜】

「他の女性の名前を出されては困るだろうが、君が錦さんを大切に扱っていた気持ちがよくわかる」

【詩桜】

「恋人の後輩とはこれほど愛しいものかと、今実感している」

【詩桜】

「年下はいいぞ」

【詩桜】

「もっとも私は君を離すつもりなどないから、君は生涯、年上の恋人しか知らずにかわいそうだな」

【詩桜】

「その分、たと甘えさせてやろう」

【詩桜】

「これからも君を困らせてやるから……その度に可愛らしい顔をして、私に愛しい想いをさせてくれ」

【詩桜】

「フフ、寝ているようで、全部聞いているのもわかってるぞ」

【詩桜】

「時間が来れば起こしてやるから、自分勝手な先輩のおしゃべりになど付きあわず、今度こそ眠ってしまうといい」

【詩桜】

「愛しているよ、おやすみ」

## 06鎌倉夜戦

【詩桜】

「すうー……ふう……」

【詩桜】

「ふう……んっ、すうー……」

【詩桜】

「ん……んん、ん……」

【詩桜】

「すう……君を、連れて……んん……根室……アリ  
ューシャン列島……そして北極へ……すうー……  
……」

## 07鎌倉の朝駆け

【詩桜】

「やあ、おはよう」

【詩桜】

「随分と驚いた顔をするじゃないか」

【詩桜】

「愛しの妹の優しい声で目覚める筈が、情け容赦な  
ど一切ない恋人の声で起こされれば、そんな表情  
にもなるか」

【詩桜】

「ひよりんは1時間前に出ていった」

【詩桜】

「どうやら事務所の友人が食中毒で入院したらしい」

【詩桜】

「マネージャーから連絡を受けて、すぐ駆けつけに  
行ったようだ」

【詩桜】

「昼間から夕方にかけては仕事だから、早朝にしか  
見舞いに行けないのだろうな」

【詩桜】

「忙しい身でありながら、友人の危機とあらば迷い  
もせず病院へ急行するとは……ひよりんはただで  
さえいい子なのに友人想いでもあるんだな」

【詩桜】

「改めて惚れ直した、君と入籍して彼女を妹にでき  
る日が楽しみだ」

【詩桜】

「ああちなみに、事務所の友人の容態は落ち着いて、  
今は快方に向かっているらしい。喜ばしいこ  
とだ」

【詩桜】

「で、君を起こしてから行くか一瞬悩んだようだが、私が来られるのならと連絡をくれた」

【詩桜】

「並々ならぬ愛情をもって君のお世話をしているひよりんが、私を信頼してその役を任せるとは……正直に言って感動した」

【詩桜】

「私がそこまでひよりんの信頼を得られていたとはな……感動で目から愛液が漏れそうだ」

【詩桜】

「というわけで、今朝は私が起こしにきた」

【詩桜】

「君のことだ、まだ眠い、もう少し布団の中にいさせろと駄々をこねるんだろう？」

【詩桜】

「君がそんな甘えた言葉を口にしたときのために、尻の中へ入れるバイブと、潤滑油にするためのローションを持ってきた」

【詩桜】

「さ、まだ布団の中で寝てていいぞ」

【詩桜】

「……なんだ、起きるのか」

【詩桜】

「せっかくだらしない君を調教したくて、ウキウキしながらここへ来たというのに……もう少し我儘を言ってくれてもいいんだぞ？」

【詩桜】

「まあ力づくで躡けるが」

【詩桜】

「なんだ、本当に起きるのか……拍子抜けもいいところだな、それならこれほど早く駆けつける必要はなかった」

【詩桜】

「……だが、早くかけつけた分だけ、君が今から支度を済ませて、家を出なくてはいけない時間まで、まだ30分ほどの余裕がある」

【詩桜】

「ひよりんが大好きな私としては、彼女の信頼を裏切るわけにはいかないが……あと5……いや10分程度は君を起こすために設けておいた時間のバッファーと見なしていいだろう」

【詩桜】

「少し、私の膝の上へ頭をのせないか？」

【詩桜】

「その方が君も目が覚めるだろう、タイムキーパーは責任をもって私が務める」

【詩桜】

「軽く頭を撫でてやるだけだ、それ以上の行為には及ばない……さ、おいで」

【詩桜】

「こうして膝枕すれば、君がすぐ起床するのなら、毎朝起こすのを手伝ってもいいが……まあ、それはひよりんの役目か」

【詩桜】

「それに私の恋人であれば、一度目が覚めたら周りに甘えたりはせず、きちんと起きられる筈だしな」



【詩桜】

「それでも、どうしても起きられないときは、こっ  
やって起こそうか……」

【詩桜】

「んっ」

【詩桜】

「なんて、これは今日だけの特別だ」

【詩桜】

「また次の機会があれば、その時は酷いことをさせ  
てくれフフ」

【詩桜】

「さ、それじゃあ起きようか」

【詩桜】

「おはよう」

08街道をゆきまくり

【詩桜】

「日が暮れてきたな……」

【詩桜】

「計算ではもう少し早く宿に着く予定だったんだが、まだ町の影も形も見えないとは……このカーナビ、壊れてるんじゃないか」

【詩桜】

「だいたい、こうなるのがわかっていたから、私は早く出発しようと言ったんだ。ここは少し走ればどこにでもコンビニのある大都会じゃないんだ、広大なる北の国だぞ」

【詩桜】

「あの時、君が三色海鮮丼とうにいくら丼で長々と悩むから……これが2月であれば詰んでいた」

【詩桜】

「なっ、違う！ 私はただ、君に牛を見せてやろうと……君だって牧場を見たときは、大はしゃぎしてアイスまで買っていたじゃないか……！」

【詩桜】

「……いや、不毛な争いはやめよう。とにかく目的地まで辿りつかねば。満足に睡眠もとらずに明日も一日中運転をするのでは、いくら私でも体力に不安がある」

【詩桜】

「ああ、違う……嫌味に聞こえたのならすまない、この無茶な旅行に君を付きあわせたのは私だからな。いくらいきあたりばったりの旅行が好きだと言っても、目的地にまで辿りつけないのではちよつとな……」

【詩桜】

「よし、決めた。少し休憩しよう」

【詩桜】

「幸い、あそこに待避所がある。車を停めて、10……いや30分ほど休憩しよう」

【詩桜】

「こうして苛立ってしまうのが一番よくない」

【詩桜】

「実を言えば、少し眠気が漂いはじめていた」

【詩桜】

「必要があれば仮眠をとって、頭をすっきりさせてから運転を再開しよう」

【詩桜】

「ふうー……」

【詩桜】

「君と付きあってから、それなりに経つ……これで品性は保っていたつもりだったんだが、少しだらしのない格好をしてもいいだろうか」

【詩桜】

「ああ、すまない……私としたことが疲労しているみたいだ」

【詩桜】

「だから、もし色気のある行為を期待していたのなら悪かったな、それは宿へ着いてからだ」

【詩桜】

「はは、そこまで非常識ではないか……とはいえ、少し抱きしめてもらう程度は考えていたんだがな」

【詩桜】

「目を覚ましたいのもあるし……あとは、些細な言い争いとはいえ、苛立って君にあたってしまった」

【詩桜】

「抱きしめられて、仲直りしておきたかったんだ」

【詩桜】

「ん、なんだ……こちらの座席へ来るのか？」

【詩桜】

「いや、私が君の方へ行けばいいのか……なるほど、ハンドルの無い分、そちらの方がゆとりはある……」

【詩桜】

「とはいえ、君の上へまたがれということだろう？  
お姫様抱っこのようにして座るには、さすがに  
スペースが狭いからな……」

【詩桜】

「君を膝の上へのせるのは日常茶飯事だが、私が君  
の上へのるのは……抱えられるのは、珍しいな……  
あまり記憶にない」

【詩桜】

「だが、たまにはそれもいい……君の膝の上で抱か  
れてみたい」

【詩桜】

「ああ、はは、またいやらしい言い方をしてしまった」

【詩桜】

「今の『抱かれない』は『抱きしめられない』の意  
味だ」

【詩桜】

「また期待させてしまったら悪かったな。繰り返し  
になるが、君の期待には宿へ着いたら応えるよ」

【詩桜】

「期待していなければ何もしないが……フフ」

【詩桜】「じゃあお邪魔する……ああ、正面からでいいんだよな？」

【詩桜】「はは、これは想像以上の密着度だな……それも、君の腰の上へまたがって……君の前でこれだけ足を開くと、さすがに少し恥ずかしい」

【詩桜】「ただ、頭を丸ごと抱きかかえられるのはいい……君、私の運転中に、シートベルトの挟まった胸を何度か見ていただろう？」

【詩桜】「気づいていたとも……それを見せびらかすほど痴女ではないが、君をからかうネタにしようとは考えていた」

【詩桜】「嫌な気分？ 君が相手なら、するわけないだろう『言えばこうして包んでやるのに』と考えていたくらいだ」

【詩桜】「車の中でこれは中々に興奮するな……」

【詩桜】「ありがとう、君の協力のお陰で完全に目は覚めたよ」

【詩桜】「疲れもだいぶ……いやほとんど感じなくなったし、これならあと2時間は気分良く運転できそうだ」

【詩桜】「けど、まあ……せっかくだ、もう少し目覚ましに付きあってもらおう」

【詩桜】「何度も言って申し訳ないが、車の中であれやこれやほしないからな」

【詩桜】「いくら周りに明かりがなくなったとはいえ……私たちを隠すものが周りに何もないのではな」

【詩桜】「車種が車種だけに、ドライバーはそれなりにいかつい男を想像するだろうから、絡んでくる輩はいないだろうと想定しているが」

【詩桜】「と言っても、そうだな……私の腰の下で、随分と期待は高まってしまっているようだし……」

【詩桜】「んっ」

【詩桜】「このくらいはしょうか」

【詩桜】「ふふっ、せっかくの良いシチュエーションで、私も甘い気持ちになっていたのに、君の唇からは三色海鮮丼の味がした」

【詩桜】「はは、冗談だ」

【詩桜】「ちゃんとソフトクリームの甘い味がしたよ」

【詩桜】「私の唇はどうだったかな……君のお口に合う味だっただろうか」

【詩桜】「さ、もう一度召し上がれ」

【詩桜】「ん、ちゅっ……ん、むっ……んむ、ちゅっ……んっ」

【詩桜】「はっ、はあっ……いけないな、軽いキスだけに留めておくつもりだったのに……君の舌がおいしすぎて、よく味わってしまった」

【詩桜】「ちゅっ、ちゅうっ、れろっ、ちゅっ……れろ、ちゅっ」

【詩桜】「もうそろそろ運転に戻ってもいい気もするが……物足りなさを覚えてしまう」

【詩桜】「最後まで駄目だ、最後まで絶対駄目なんだが……君の顔を撫でるくらいはいいだろうか……」

【詩桜】「はあ、愛しい……あとで絶対に可愛がってやるからな……」

【詩桜】「今日の宿にも温泉があるんだ」

【詩桜】「念の為、チェックインを20時と伝えておいてよかった……もう少しだけ君を味わえる」

【詩桜】「ちゅっ……その耳、味わってやりたいな……ん、何する気……ひゃっ!」

【詩桜】「ば、馬鹿、私は君の耳を味わう側で、私の耳を君に責めてほしいわけでは……んっ、ひゃうっ……くっ」



【詩桜】

「それなら私は首筋だ……れろっ、れろ、れろお……フフ、どうだ……んっ！ 舌を挿れるな……」

【詩桜】

「そこまでするなら、君がじっと見ていたこの胸に触れてはどうだ？ 服の上からであれば……ごまかせる範囲だろう」

【詩桜】

「んっ、ふうっ、はッ……君の手の動き、いやらしいな……んっ、服の上からだからな、もう少し強く揉んでもいい……」

【詩桜】

「はあっ、はっ、服の、中は……君が、最後までするのを我慢できるのであれば……その、過激になりすぎない範囲で……」

【詩桜】

「君は……どうだ？ 我慢できるのか？ 中に挿れるのは……いや、しかし……その、口でしてやるくらいは……だが、咄嗟のときに、運転席に誰もいないというのは……」

【詩桜】

「そうだ！ 運転席に座りながら手でしてやる分には……ギアを握っていると思われるんじゃないか！？」

【詩桜】

「うわあっ！」

【詩桜】

「なっ、なんだ、人がいたのか！？ すまない、君には迷惑をかけないようにしてみせる……あっ」

【詩桜】「し、鹿……？ エゾシカか……道路へよく出てくるとは聞くが……」

【詩桜】「そういえば、さっきからコツコツ音がしていた気がする……私たちのキスは、この鹿に見られていたのか……」

【詩桜】「ああ、車体は大丈夫な筈だ……頑丈な造りだし、そもそもこういった衝突を前提に作られている」

【詩桜】「しかし、やはり……周囲に何もない場所で、迂闊な行いはするものではないな……私としたことが、よく自省する」

【詩桜】「警察であれば、君も一緒に注意を受けるところだった……私一人で責任をとれる範囲ならいいが、君に迷惑をかけてはいけないな」

【詩桜】「ただ、車の中で……は身体が熱くなった」

【詩桜】「いずれまた場所を変えて……安全を確保できる場所で、また……な」

【詩桜】「それと宿に着いて、温泉も入って、二人きりになったら……今日は手でしてやるつもりだ」

【詩桜】「君も好きなだけ私の胸を楽しむといい」

【詩桜】「オーディエンスは……もう去ってしまったようだ」

【詩桜】

「出発する前にもう一度だけキスをしよう……もちろんソフトなものな」

【詩桜】

「んっ」

【詩桜】

「それじゃあ最後まで旅を楽しもう……はは、君との旅行は楽しい」

09徒徒然然草

【詩桜】

「……ん、なんだ」

【詩桜】

「ああ、これか？　今日は勉強ではなく、創作の方  
をしている」

【詩桜】

「そしてこれも毎回言っているが……君が来るとわ  
かっている時間に、君がいるとできない活動はし  
ない」

【詩桜】

「執筆をしていると言っても、今は思いついたネタ  
を書き留めている程度だ」

【詩桜】

「君の手が空いたのなら少し話そうか？」

【詩桜】

「はは、だから……それほど気を使わなくてもいい  
というのに」

【詩桜】

「いずれ共に過ごすことになっても、私の仕事場は  
分けるつもりだ」

【詩桜】

「このマンションをそのまま借りて、執筆に集中し  
たい時はここへ来るといいう形でもいいな」

【詩桜】

「というわけで、私は自分の執筆する環境作りの術  
は心得ている」

【詩桜】

「その点で君が私に気を使う必要はない……まあ、  
来るなど言っているのに仕事場へ来たり、集中す  
ると言っているのに理由もなく会いに来たら追い  
返すが」

【詩桜】

「ん？ これはこれでパートナーとして傲慢か？」

【詩桜】

「受け取り方によっては、私が執筆に入ったら、君には我慢を強要しているようにも聞こえるな」

【詩桜】

「私はこれを生活の糧としている以上、今後どうあっても、生活の面で君と折り合いをつけなければならぬ場面が多々出てくるだろう」

【詩桜】

「だが創作には妥協ができて、君というパートナーは替えが利かない」

【詩桜】

「私が冷静さを欠いて傲慢になっていたら、落ち着いたあとでよく叱ってやってくれないか」

【詩桜】

「はは、君なら私の活動をよく理解して、そう言うてくれるだろうこともわかっている」

【詩桜】

「しかし私がそれをわかってしまっているのもよくない」

【詩桜】

「この意識がある限り、先ほどの発言然り、私は仕事を生活の中へ割り込ませ、君にずるずると甘えていってしまうだろう」

【詩桜】

「普段は別にいいんだ、お互いに譲り合いもできるだろう」

【詩桜】

「だが切羽詰まったときにこそ、積みもり積もったものがお互いの関係を崩しかねない」

【詩桜】

「私は元々人間関係に嫌気が差して、それが必要な場面でも逃げてきた人間だからな」

【詩桜】

「一人で生きて一人でくたばるのならないが、君という大切な人ができた以上、そうはいかない」

【詩桜】

「君が私を叱れないのなら、頭がかかきっている未来の私に向けて、今のうちに一筆書いておこう」

【詩桜】

「『私はこの人を一生愛すると決めた、頭を冷やせ』」

【詩桜】

「よし書けた。もう一度読むぞ。『私はこの人を一生愛すると決めた、頭を冷やせ』……これでよし」

【詩桜】

「作家なんてものはな、誰もが多かれ少なかれ『自分の作品様のためなら、世界の全てがその品質向上のために協力すべきだ』と本気で考えている傲慢な生き物だよ」

【詩桜】

「実際、以前の私はそれで何一つ悪びれていなかったし、今でも赤の他人に対してはそう思っている」

【詩桜】

「だからまあ、君に対しては認識を改めたいんだ」

【詩桜】

「『私の恋人様のためなら、私の作品全てが、私と私の恋人の円満な関係のために協力すべきだ』とな」

【詩桜】

「……なんてことを今は言っていないでも、いざ追い詰められれば簡単に『私の仕事の邪魔をするな』と君に理不尽を押し付けるのが私という人間だ」

【詩桜】

「だからそんな時は、私を叱るか、この書き置きを見せて、私の頭を冷やしてやってくれ」

【詩桜】

「私というどうしようもない人間と末永く付きあつてほしい」

【詩桜】

「君という恋人がお気に入りなんだ」

【詩桜】

「……君もつくづく、難儀な恋人を持ったものだな」

【詩桜】

「私を足で選んだことを後悔するぞ」

【詩桜】

「いや、足で選んだわけじゃないか……胸かもしれないな。外見的特徴であればわかりやすく結構だ」

【詩桜】

「私が君を選んだ理由は……私は、行動力のある人間が好きだからな」

【詩桜】

「君を少し気に入りはじめていたところに、私と同じ大学へ進学すると言われて、その熱烈な告白に胸を射抜かれたよ」

【詩桜】

「もっとも、その努力と結果が伴ったものだが」



【詩桜】

「あとは、ドラマチックな出来事もあったしな」

【詩桜】

「ただ、何度でも言うが、絶対にまた生活のすり合わせにおいて私たちは揉める」

【詩桜】

「そのたびに場面場面で仲直りしていこう……私も、この傲慢な性格を君に向けるのはやめたいと努力している。しているんだ、努力だけはな」

【詩桜】

「実際にどんな形で揉める可能性があるかと言えば……そうだな」

【詩桜】

「たとえば……一般的な会社に務めていれば育児休暇は貰えるが、私の場合はそれが無い」

【詩桜】

「もちろん関係各所に向こう数年は育児に専念する旨を連絡はする。しかし、税金関係で税理士との打ち合わせは毎月あるし、私の狭い交友関係の中でも、頼まれ事をすれば断れない場面がきつと出てくる」

【詩桜】

「その時は君も仕事で忙しい筈だが、育児を頼まなければいけない場面が多々出てくる筈……ん、なんだ。私は何かおかしいことを言ったか？」

【詩桜】

「何を今さら照れているのかわからないが、さんざん私に中出ししているだろう」

【詩桜】

「いつかは当たるし、私は産むぞ」

【詩桜】

「母子ともどもよろしく頼む」

【詩桜】

「女の子は必ず欲しいな」

【詩桜】

「君の血を受け継いだ女の子ということは、将来的に、ひよりんに似る可能性が高い……いわば、私とひよりんの子と言えるかもしれない」

【詩桜】

「フッフ照れてしまうな……溺愛してしまいそうだ」

【詩桜】

「想像したらすぐにでも娘が欲しくなった、今から子作りするか」

【詩桜】

「ん？ 安直すぎる？ そこは行間を読んでもらいたい」

【詩桜】

「君に愛されたくなったんだよ」

【詩桜】

「末永く、よろしく頼む」

10カタカタループ

【詩桜】

「んー……」

【詩桜】

「違うか」

【詩桜】

「(こ)くん……」

【詩桜】

「ふう……」

【詩桜】

「いや……んー……」

【詩桜】

「……ああ」

【詩桜】

「(す)う……(ふ)うー……」

## 11 ドライブループ

---

【詩桜】「……そろそろ曲を変えるか。君の好きな音楽をかけていい」

【詩桜】「今の景色よかったな」

【詩桜】「目的地変えるか……」

【詩桜】「少し退屈だ、なんでもいいから話しかけてくれ」

【詩桜】「(こく)ん……」

【詩桜】「ん？ なにを見ている？」

【詩桜】「次にコンビニ見つけたら寄りたいな……」

【詩桜】「ん？ この道で合ってるよな？」

【詩桜】「あの車、いい度胸している……」

【詩桜】「あまり人の横顔を見るな、少し照れる」

---